

〈総説〉

# ト辞出現の歴史的経緯について

The Historical Circumstances of the Appearance of Oracle Inscriptions

末次 信行<sup>1</sup>

## 要 旨

殷代武丁期（前1250～前1192※）に突然出現する「ト辞」について、その出現の歴史的経緯を検討したものである。そのうえで、城郭が無いという、当時の都市としての殷墟の欠陥を、「ト辞」の「盟約的機能」が代替する役目を果たし、神聖封建王朝として、あるいは戦士国家として発展する基礎を築いたという仮説を提出する。

※この年代については『中国歴史紀年手冊』（気象出版社、2002年）による。一応の目安で絶対的なものではない。

キーワード：ト辞，殷墟，洹北商城，武丁，盟約

Oracle Inscriptions, Yim Ruins, Huanbei Shangcity, Wu Ding, Covenant

## はじめに

「甲骨文字は突然に出現する」とは、貝塚茂樹の指摘である<sup>注①</sup>。

甲骨文字すなわちト辞（占いのことば）が、歴史上、唐突に殷墟に出現することを指す。

本稿は、この「突然の出現」の理由について一仮説の提出を目的とするものである。

手順としては、当時の都市機能の観点から、殷墟の都市としての役割を述べ、ついでト辞の盟約的機能を推定し、そのうえで、最も早期のト辞とされる師組ト辞について検討したい。

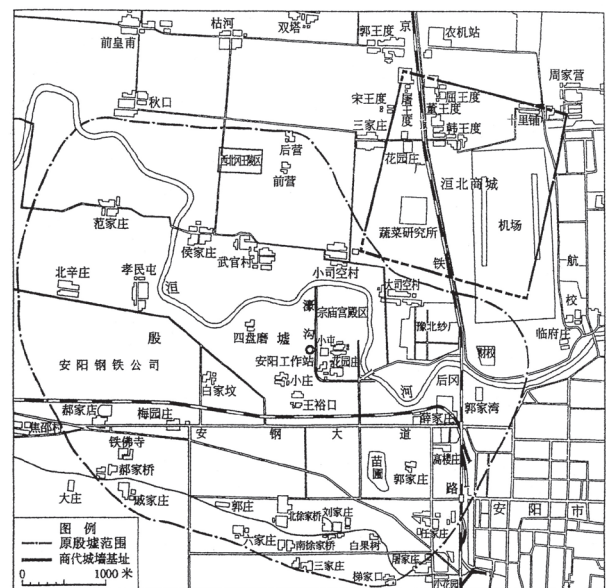
## 一、殷墟と城郭都市の機能について

宮崎市定は、「中国上代の都市国家とその墓地」（『東洋史研究』第28巻第4号、1970年）において、「小屯は殷墟でない」という論を展開し、小屯は都市国家に付属する墓地であって都市（商邑）ではないとした。城郭のない都としての「殷墟」は、中国古代を都市国家時代とする宮崎説にとって、何としても打ち消す必要があったらしい。要するに、城郭のもつ都市機能、すなわち防衛施設というか、敵国の攻撃から邑内の住人や施設を衛る役割という観点からすると、殷墟は欠陥都市となる。

さて、図Aは、その殷墟の範囲と、新たに発見さ

れた洹北商城の城郭跡を図示したものである。殷墟の範囲内には、墓地のみならず、宗廟や宮殿とされる遺跡をはじめ、居住遺跡、銅器遺跡、骨製品やそのほかの手工業のための作業場遺跡がみられ、さらに大型のため池（池苑）が発見されている<sup>注②</sup>。殷墟が城郭のない都市であったことは間違いない<sup>注③</sup>。しかし、王都として、「城郭がないこと」は、異例中の異例であつたらしい。

ちなみに、江村治樹は、「先秦都市社会の形成－



図A

（出所：王震中『商代都邑』図4-2「洹北商城与原殷墟範囲」）

二里头・殷周から戦国へ」(『東洋史苑』81号、2013年)と「先秦都市社会の形成(続) - 新石器時代」(『東洋史苑』86・87合併号、2016年)との論考において、新石器時代から二里头・殷周、さらには戦国までの都城遺跡をつぶさに調査・検討し、都市の形成と発展について考察する。新石器時代の都市遺跡122箇所、二里头・殷周・戦国時代の都市遺跡84箇所が、検討対象となっている。都市遺跡には「城牆」とともに「城濠」のあるものもあり、山城であったり、また環濠の場合もある。「城牆未発見」という例外もあり、殷墟もこれに当たるが、基本的には城郭が存在する。

軍事的防衛という観点からは、環濠施設もかなり見られた。殷墟にもこれがあるとされる。図Aには、洹河を天險とし、宗廟・宮殿区を中心とする都を取り囲む「濠溝」が記されている。ところが、この大灰溝(図Aの濠溝)とかつて呼ばれた環濠は、間断性の溝とされ、環濠としての不完全性が指摘された<sup>注④</sup>。

つまり、殷墟は、城郭もなければ、環濠も不完全な、いわば無防備状態にあったということである。

さて、図Aにもどる。ここにみえる殷墟の北東に位置する「洹北商城」についてであるが、1999年に発見され、河壇甲(第13代殷王)の都との説もあったが、現在は盤庚(第20代殷王)の都説で落ち着いている<sup>注⑤</sup>。この「洹北商城」は火災により放棄されたらしい<sup>注⑥</sup>。

これを要するに、盤庚遷都前後から「洹北商城」が構築され、やがて武丁(第23代殷王)即位前後に殷墟へ都を移さざるをえない状況に立ち至ったと推定される。つまり、武丁は城郭もなければ、環濠も不完全な、いわば無防備状態の殷墟で王位を護らねばならない、あるいは政治を行うことになった、というわけである。

## 二、卜辞の盟約的機能について

戦争の許諾を占う卜辞のなかには、「帝(上帝)」の意思を問う形をとるものと「下上(殷王の祖先神)」の意思を問う形をとる場合が、武丁時代のある時期にはあった<sup>注⑦</sup>。たとえば、

ア「貞王夷沚戛从巴方、帝受我又」(合集6473正 = 乙3787)

とあり、この卜辞内容は、「王」が「沚戛」とともに「巴方」を征伐することの是非を問う。亀版で、字体(崎川分類)は「賓一大類(過渡②)」、YH127出土で

ある<sup>注⑧</sup>。また、

イ「辛巳卜殷貞、今者王夷戛从伐土方、上下弗若、受…」(合集6418)

とあり、この卜辞内容は、「王」が「戛」とともに「土方」を征伐することの是非を問う。骨版で、字体(崎川分類)は「典型賓組」である。

両卜辞から知られるように、占卜によって征伐という「大事」の是非が決められ、「王朝」の公式の大事となると解せられる。少なくとも建前としては、占卜による決定が、実際の軍隊発動に必要とされた。

ところで、占卜に頼らねばならない状況は、「異論や反対がある」ということを想定しなければならない。「王」が絶対的な政治権力をもつ、という状況にはない。もし、そのような「王」の専断が可能であれば、卜辞を刻み、貞人たちや「王朝」の中枢にいる重臣たちに示す必要はない。他例になるが、卜辞として甲骨版に重要案件が刻まれ、刻まれた文字が鮮明に読み取れるように、朱墨が刻字内に充填されることはないのである。「神との対話」という形をとったにしても、あくまで文字は人と人との意思疎通の道具であることを前提として、卜辞は理解されるべき性格のものである<sup>注⑨</sup>。

引用したアとイの両卜辞は、「巴方」征伐あるいは「土方」征伐について占われた。「王」が「沚戛(戛)」とともに行軍するかの可否が問題とされている。「沚戛(戛)」は「沚」国の君長で、「土方」や「苦方」に地理的に近いところから、西北部にある国とされる<sup>注⑩</sup>。

ここで異論を想定してみる。たとえば、征伐に要する莫大な軍費からすると「征伐」は無用であるという立場もあれば、貞人のなかに敵国に親しい立場もありうる。こうした立場の意見が有力になると、「巴方」なり「土方」が、殷の味方の「邑」を侵略しようと凌辱しようと、うっちゃっておけ、「土方」に地理的に近い「沚」国は放棄せよ、という極論が想定される。こうした極論が占卜機関内の議論で優勢となった場合、「沚」国は、「土方」と単独で勝利するか、降参するか、あるいは同盟を「土方」と結ぶかの選択に迫られるにちがいない。「沚」国の立場はこのように微妙である。しかし、殷王朝にとっては、そのような極論の場合、殷の有能な將軍である「沚戛(戛)」を失うことになる。いわば西北面での『藩屏』としての機能を、喪失することになるのである。

貞人たちにはそれぞれの立場や種々の考えがあ

り、こうした時、占いが効力を発する。「王」あるいは「王朝」にとっての利害関係から、敵国征伐の必要があり、異論者を説得しなければならない場合、占卜にかけるといふ形が、もっとも宗教的・政治的に最良の選択となったはずである。

他方、「沚」国にとっても、揺るぎない約束あるいは両者の関係が簡単に反故にされない、盟約に該当する保証のごときものが必要であったにちがいない。

双方が殷の公的機関の占卜を信じるという、共通の基盤があれば、卜辞に「盟約」の機能が生まれるというわけである。

なお、信仰対象についてであるが、当時の殷人に観念された神界は、至上神として「帝」が最上位に位置し、亡くなった祖先や功臣などが、おそらくはある序列の元に至上神の周りに、それぞれに相応しい位置を占めていたらしい。地上で有力であった祖先は、天上でもそれなりの「神力」をそれなりの立場で有していたと推定される。

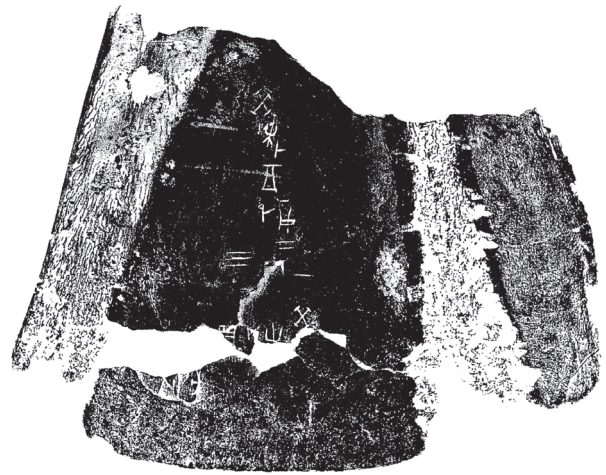
卜辞には「帝（上帝）」と「下上（殷王の祖先神）」のあることを、本節冒頭で指摘した。「帝」と「下上」は地上の力関係に左右されて、「下上」が至上神の権限の一部を代替する場合があったとみられる。

「帝（上帝）」に対する許諾を求める例は、ア卜辞である。YH127出土の亀版で、字体（崎川分類）は「賓一大類（過渡②）」であり、「賓一」から「典型賓組」へ移行する時期の卜辞とされる。「下上（殷王の祖先神）」に対する許諾を求める例は、イト辞である。骨版で、字体（崎川分類）は「典型賓組」とされ、前者よりも後れる卜辞となっている。「帝」信仰の厚さが相対比され、「下上」信仰が顕在化する時代の卜辞といえる。ただし、ほとんどの卜辞には、問いかける神については明記されていない。つまり、実際には何者に問いかけた卜辞なのか、ほとんどが不明というわけである。

### 三、武丁早期卜辞について―師組大字類を中心に

李学勤・彭裕商は、武丁早期の卜辞として師組卜辞（貝塚・伊藤の王族卜辞）を指摘する。とりわけ、師組大字類は字体が円潤でやや大きく手写体であり、みえる貞人は「王」と「扶」のみであり、同時代の考古学的発掘による金文や石戈上の文字に近いとし、「武丁早期」のものと推定する<sup>注⑩</sup>。なお、この師組大字類は、黄天樹や楊郁彦の「肥筆類」にほぼ属す<sup>注⑪</sup>。

武丁早期の「王」の貞人としての立場について、合集21405（＝乙9086）を取りあげたい。図Bがそれで、骨材、YH344西の出土である。師組大字類また肥筆類に属す。



図B  
（出所：乙9086＝合集21405）

上段左の行に「癸未ト王ト」があり、すぐ右に「用二」とみえる。「王」が占ったことは確かである。<sup>3338</sup>下段に右から左に「癸未ト貞…」とあり、同日の「癸未」の日の卜辞がある。また、「用二」と読んだ文字の右下に「一」が、左下に「三」がある。全体が変則的な字並びであり、反面の拓本が無いので確証はないが、数字の「一」「二」「三」は兆序数らしい。とすれば、「癸未ト貞…」についてのト兆が、三度おこなわれたことになる。このト兆のうち、二番目のト兆に「神意を見る」と判断されたものと解せられる。すなわち、「王」が三たびトしたところ、二番目のト兆に神の意思が現れ、この「王」の占卜を採用（「用」）する、となる。この採択すなわち「二番目のト兆に神意が見える」と判断した者は、「王」ではない。「王」以外で、同じ占卜機関に属する貞人にちがいない。当時の占断をおこなっているのは、「扶」や「叶（載）」<sup>0729</sup>などである。そうだとすると、「癸未ト王ト用二」の文言は、命辞ではなく占辞の類いとみなすことができる。

当時の「王」の占卜機関における立場は、このようであった。

また、師組卜辞の主要な占卜内容は、祭祀と戦争とが指摘される<sup>注⑬</sup>。

とりわけ、師組大字類の戦争卜辞には、

ウ「己亥ト、扶、方征商（合集20440＝甲2378）」〈骨材、横十三丙北支一出土<sup>注⑭</sup>〉

エ「…今丁方征（合集20441）」〈骨材〉



オ「… 邑征（合集19851正 = 乙8674）」〈骨材、B119出土〉

とあり、敵国である「方」が、殷の都である「商邑」を攻撃するか否かを問うたり、「邑」が攻撃にさらされないかを問うト辞に解せられるものがある<sup>注16</sup>。

また、

カ「癸亥卜、扶、方至、今日（合集20483）」〈骨材〉  
キ「乙巳、方至…（合集20484）」〈材質不明〉

ク「庚午卜、王、方至今日（合集19777）」〈亀材〉とあり、敵国である「方」が「今日（昼間）」という時間内に「至」るか否かが占われている。なお、クト辞は、「肥筆類」に属すが、大字ではない。さらに、

ケ「戊申、王、令庚追方（合集20462 = 甲243）」〈亀材、36坑出土〉

コ「乙亥卜、令虎追方（合集20463反 = 乙9085）」〈骨材、YH344西出土〉

サ「戊戌卜、扶、歩今日追方（合集20460）」〈亀材、横十三丙北支出土〉

とあり、「庚」や「虎」という、味方の将軍に「方」を追撃させることを問う。「庚」はまた、

シ「… 目燎曰、庚其捍<sup>2401</sup>（合集20555 = 乙9066）」〈骨材、YH344東出土〉

とあるように、「庚」には、殷の都邑を捍禦せしめようとする文言もみえる。「庚」の敵国攻撃と殷都捍衛の役目のあったことが知られる。なお、ケとサの両ト辞は、「肥筆類」であるが、大字ではない。また、

ス「乙卯卜、王亡宮（合集20306）」〈亀材〉

とある。このト辞には大字と小字をふくむが、「肥筆類」にはちがいない。「亡宮」が具体的に何を意味するか断定はできないが、「宮」という建築物の消失の可能性を問うたト辞らしい。

以上、「方」なる敵国が商（殷墟）を攻撃し、また、「今日」という、時間的にかなり切迫した状況も推定され、また、「庚」や「虎」という、将軍たちに「方」を追撃させてもいる。こうした占いがされる時期、殷墟周辺は、平和でなかったことは確かである。

また、師組大字類は骨材が主であり、骨材奉納は一例「丁丑簋入（合集20646 = 甲2329）」<sup>3198</sup>みられる。横十三丙北支出土で、明らかに「師組大字類」もしくは「師肥筆」に分類される<sup>注17</sup>。

字体分類で、師組小字類になると、「扶」<sup>3395-0952</sup>「勺」<sup>3001</sup>「師」の主要貞人が揃い、占卜に亀材と骨材が併用されるようになる。また、亀材奉納も盛んになり、甲尾刻辞がみられるようになる。占辞については、

やはり、なお「王」の占断は未見であり、「扶」や「叶（載）」によって占断されている。戦争ト辞は、師組小字類の方が大字類よりもはるかに多くなる<sup>注17</sup>。

占卜に対する信頼と信仰が骨材から亀材に広がるとともに、信奉者も増加していったらしいことは、拙論「ト占用亀骨の貢納制概略（上下）」（『千里金蘭大学紀要・短期大学部』第35号〈2004年〉・36号〈2005年〉）で、すでに論じたところである。

## おわりに

筆者は、武丁になって突然にト辞が出現した背景には、相応の緊迫した政治的・宗教的状況があったと推定する。ト辞の不必要な時代から必要な時代へと転換したのは、重大な歴史的要因があったと考えるからである<sup>注18</sup>。

本稿での検討結果、この時代の転換点に想定される状況はつぎの通りである。

一、盤庚が遷都したのは、いわゆる殷墟ではなく、城郭のある洹北商城であり、武丁即位前後、この商城が大火に見舞われ、放棄せざるをえなくなったとされる。すなわち、宮殿が消失し、城郭の重要な役割である「防御施設」を利用できなくなる事態となった。

一、殷墟の「防御施設」とされるものに、いわゆる大灰溝がある。洹河を天險とし、宗廟・宮殿区を中心とする都を外敵から防衛するための環濠とされるが、この大灰溝（図Bの濠溝）は間断性の溝とされ、環濠としての不完全性が指摘された。つまり、殷墟は無防備状態にあったということである。

こうした殷墟の窮状にあって、ともすると外敵の脅威に晒され、さらには王族の四分五裂も想定される時期に前後して、「ト辞」が甲骨版に刻まれ始めるのである。

つまり、殷墟が危殆に瀕し、この都邑の防衛機能を「ト辞」が代替したとの一仮説をここで提示したいのである。ト辞の「盟約的機能」が、「王」一族を軸とする上下関係を再確認し、また、新たに占卜に対する信仰に基づいて、「王」族以外の勢力とも君臣関係を結び、殷墟の都城としての不完全さを克服する結果につながったというわけである。ト辞が盟約的君臣関係の絆となることを君臣双方が認め合う形を形成したのである。ト辞による神聖封建制ともいべき王朝の始まりといえる。あるいは、戦士国家として発展する基礎を築いた

というべきかも知れない。

## 注

- ① 貝塚茂樹「漢字の起源」(『中国の漢字』(中央公論社、1981年) 36～39頁)。また「殷代文化の考古学的な編年(鄒衡説)のなかで、甲骨文字がほとんど何の序奏もなく、唐突に発現する」とのべ、その理由を、武丁時代以後の殷王朝の活動範囲の急な拡大と文化一般の向上(鄒衡説)と無関係ではないとした。
- ② 殷墟内については王震中『商代都邑』(中国社会科学出版社、2010年) 318～411頁、また、水利関連については、張興照『商代水利研究』(中国社会科学出版社、2015年) 238～240頁参照。
- ③ 江村治樹「先秦都市社会の形成－二里頭・殷周から戦国へ」(『東洋史苑』81号、2013年) 14～15頁参照。
- ④ 岳洪彬・何毓靈(中国社会科学院考古学研究所)「新世紀殷墟考古的新進展」(『中国文物報』2004年10月15日号第7面)。
- ⑤ 前掲③「先秦都市社会の形成－二里頭・殷周から戦国へ」12～13頁参照。
- ⑥ 同上「先秦都市社会の形成－二里頭・殷周から戦国へ」12～13頁参照。また、胡洪瓊「洹北商城与中商文化」(『殷都学刊』2009年第3期)、前掲②『商代都邑』265～293頁参照。
- ⑦ 末次信行「殷代武丁期卜辞に見える「帝」と「下上」」(『立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所』漢字学研究』第1号、2013年)参照。
- ⑧ 崎川分類は、崎川隆『賓組甲骨文分類研究』(上海人民出版社、2011年)による。以下おなじ。この『乙編』にみえる甲骨版の出土地点については、石璋如『(小屯)遺址的発現与発掘・丁編－甲骨坑層之二』(中央研究院歴史語言研究所、1992年)による。以下、『乙編』については同じ。
- ⑨ 末次信行『殷代気象卜辞の研究』(京都・玄文社、1991年) 3～5頁。
- ⑩ 孟世凱『甲骨学辞典』(上海人民出版社、2009年) 309～310頁。
- ⑪ 李学勤・彭裕商『殷墟甲骨分期研究』81～84頁(上海古籍出版社、1996年)。
- ⑫ 両説については、それぞれ黄天樹『殷墟王卜辞的分类与断代』(文津出版社、1991年)、楊郁彦『甲骨文合集分組分類總表』(藝文印書館、2005年)参照。

- ⑬ 前掲⑪『殷墟甲骨分期研究』62頁。
- ⑭ この『甲編』にみえる甲骨版の出土地点については、石璋如『(小屯)遺址的発現与発掘・丁編－甲骨坑層之一』(中央研究院歴史語言研究所、1985年)による。以下、『甲編』については同じ。
- ⑮ 「方」については、羅琨『商代戦争与軍制』(中国社会科学出版社、2010年) 217～227頁参照。
- ⑯ 末次信行「卜占用亀骨の貢納制概略(下)」(『千里金蘭大学紀要・短期大学部』第36号2005年) 13～14頁では「入」骨例として保留したが、字体による分類が明確になったので、本稿では師組の奉納例としておく。
- ⑰ 前掲⑪『殷墟甲骨分期研究』334～338頁。
- ⑱ 前掲⑨『殷代気象卜辞の研究』3～5頁参照。

## 《略称》

甲・『甲編』／小屯・殷墟文字甲編(董作賓)／1948年  
 乙・『乙編』／小屯・殷墟文字乙編(董作賓)／1949年  
 合集／甲骨文合集(郭沫若ほか)／1978～1983年

## 《その他》

○甲骨文字(初出のみ)に付した四桁のアラビア数字は、姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞類纂』(中華書局、1989年)の字形總表にみえる番号である。

